

台湾高砂族の研究 : 高砂族の研究史と分類(三)

土居, 平

九州大学医療技術短期大学部診療放射線技術学科

<https://doi.org/10.15017/183>

出版情報 : 九州大学医療技術短期大学部紀要. 15, pp.71-78, 1988-03-28. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン :
権利関係 :



台湾高砂族の研究

——高砂族の研究史と分類(三)——

土居 平*

A Study on the Formosan Aborigines —(3)—

Taira Doi

4.

台湾に於ける漢民族、及び高砂族に関する調査・研究で多大の業績を残した「臨時台湾旧慣調査会」も、1919年には事実上の解体をしていたが、1922年に『番族慣習調査報告書』(第五卷の三)を発刊して、そのすべての業務を終了した。これにより大正期における高砂族の組織的な調査・研究は終焉を告げるようになった。

昭和期に入ると、1928年に台北帝国大学が創設されることになり、文政学部⁽¹⁾に土俗人種学研究室の設置をみた。高砂族研究史における第4期の開始である。

土俗人種学研究室は講座編成上は史学の補助学科のかたちとなっていて、スタッフは教授1名(移川子之蔵氏)、助手1名(宮本延人氏)、それに臨時嘱託身分(馬淵東一氏)の3名であった。⁽¹⁾

1930年になると、岡田 謙氏(1906~1969)が社会学講師として赴任し、主として高砂族を対象とする実証的な研究を開始されるようになり、さらにその翌年からは帝国学士院による慣習法用語調査事業のために古野清人氏(1899~⁽²⁾1979)の高砂族調査が始まっている。

従来の高砂族調査は、一部を除いて総督府を中心とした立法・行政、あるいはいわゆる理蕃を目的として総督府主導のかたちで実施されて

きた傾向が強かった。しかし、ここにきて漸く現地台湾における高砂族研究のための学術機関が誕生したわけである。

この台北帝大は、その後20年に満たずして歴史の幕を閉じることになったが、土俗人種学研究室と言語学研究室とは、高砂族研究史に於ける不滅の業績を挙げることになる。

それは、上山満之進氏(第11代台湾総督・大正15年7月~昭和3年6月)が、総督退任に際して各界から寄せられた餞別を高砂族研究のために台北帝大に寄付されることになり、この資金が土俗人種学研究室と、言語学研究室とに二分されたことに依る。

調査旅費の乏しい国立大学の研究室が、この資金とともに移川、宮本、馬淵の人材を得たことにより、このような extensive な調査・研究をなし遂げることが出来たのだといえよう。

それとともに、土俗人種学研究室を中心とする「南方土族学会」が組織され、研究誌『南方土族』が刊行(1931年創刊、1944年4月終刊、終刊号は『南方民族』と改題)されるようになった。

一方、この調査とほぼ時を同じくして始まったのが台湾総督府警務局による「蕃族調査」である。1930年度以降五ヶ年の継続事業(1930年9月9日附総警第404号)で「高砂族生活ノ安定並高砂族指導ニ関スル新方策ヲ樹テ以テ蕃地開拓ノ促進ヲ期」⁽³⁾するため、と謳われている。

*九州大学医療技術短期大学部一般教育

この「蕃族調査」は、「高砂族調査」と「高砂族所要地調査」との2部から成るもので「高砂族調査ハ、高砂族ノ現有状態ヲ調査シ、高砂族所要地調査ハ高砂族ノ生活安定ヲ策スル為必要ナル土地ノ調査ヲナシ其ノ所要地を決定」するためのもので、調査に従事したのは総督府警務局職員であった。

けれども、皮肉な事にこの事業が開始された翌月末（10月27日）には「霧社事件」が発生した。この事件は、従来のいわゆる理蕃政策を大きく修正させることになり、やがて「理蕃政策大綱」が制定・実施されることになる。しかしそれ以降もピスタン駐在所襲撃事件（1931）、大岡山事件（1932年）、逢坂事件（1933年）などが続発している。

事件の舞台になった霧社には、これより先の1917年には、当時未だ官界（貴族院書記官長）に在った柳田国男氏が、民政長官下村 宏氏等とともに訪れている⁽⁴⁾。そのほか1920年の夏には佐藤春夫氏も台湾旅行の途中でやはり此処を訪れ、後に作品「霧社」（『改造』1925年に3月号）を残している。

霧社は台湾でも有数の景勝地であり、風光明媚なこともあるが、いわゆる理蕃のモデル地域と考えられていただけに、総督府をはじめとして理蕃機関やその関係者たちに与えた事件の衝撃は、とりわけ大きかったであろう。

この調査事業のために、総督府の殖産局から警務局に転勤してその任に当たった岩城氏によると、「赴任の当時は恰かも本島未曾有の霧社反抗六蕃社大討伐の真最中に際会し、これが為め、蕃地開発調査事務の如きは、一大頓挫を来し、一時まったく五里霧中に彷徨ひ、果してその調査を開始し得べきや、頗る懸念⁽⁵⁾されるような状態であった、という。

事件勃発によって、調査事業の進行が阻害されただけでなく、その調査方法についても再検討を迫られることになり、結局、事業は三ヶ年間の延長をみることになった。調査の実査が行われたのは昭和5年度から9年度までで、それ以降は調査結果の内容の推敲と、その補整、

集計発行に当てられている。

公刊されているのは

『高砂族調査』第一編 1936年刊

戸 口

衛 生

『高砂族調査』第二編 1937年刊

生 活

内台人トノ接触

『高砂族調査』第三編 1937年刊

進 化

『高砂族調査』第四編 1937年刊

蕃社概況

迷 信

『高砂族調査』第五編 1938年刊

総 覧

『高砂族調査』第六編 1939年刊

薬用草根木皮

第一編から第四編までは各種の統計資料が収録され、第五編は当時の各部族、各集落ごとの沿革、他社関係をはじめ社会組織、迷信などの状況について詳述されている。

今一冊は『蕃地開発調査概要並高砂族所要地調査表』で、これは1937年に刊行されているがその中の「高砂族所要地調査書目録」によると⁽⁶⁾、収集された資料は

報告書頁数	8,175
調査表綴頁数	2,434
添付図面枚数	122
写真帳写真枚数	248

にのぼるとされているから、公刊されたのはこれらの中の極く一部にとどまったことになる。

蕃地開発調査が、行政上の施策策定の必要から実施されたことはいうまでもないが、収集された資料は、社会人類学や社会学にとっても貴重であることに変わりはない。昭和初期における高砂族に関する調査資料としての価値は非常に高いものがある。

これについて、馬淵氏も「社会人類学にも有益な資料を少なからず含んでいる」と述べ、「これらの資料に基づいて社会人類学的な調査

が更に進められたならば、学界を裨益すること多大⁽⁷⁾であったろう、と評価されている。

「高砂族調査」では総督府分類の例にならって次の7種族に分類されている。

1. タイヤル族
2. サイセット族
3. ブヌン族
4. ツオウ族
5. パイワン族
6. アミ族
7. ヤミ族

5.

前記の上山資金による高砂族研究は、言語については小川尚義教授（台北帝国大学）と浅井恵倫教授（大阪外国語学校）に、また土俗については移川教授、宮本助手、馬淵囑託がそれぞれ委嘱されることになった。

その成果は、1935年『原語による台湾高砂族伝説集』及び『台湾高砂族系統所属の研究』として刊行されている。

『台湾高砂族系統所属の研究』は移川教授と宮本助手とが昭和5年の7月から調査を開始し、馬淵氏は昭和6年3月から翌7年暮れまで参加したことになる⁽⁸⁾。

この間には、移川教授自身都合で霧社への出発を一日延ばしたために「霧社事件」遭遇を免れるなどのエピソードを織りまぜながら、三氏それぞれの調査従事日数は移川88日、宮本129日、馬淵425日、延べ632日に達した。

各社での系譜採集日時の記録（『台湾高砂族系統所属の研究』第二冊）によると、古いものでは1928年7月（移川—系譜84—Atayal族・Taroko-Kubayan社）のものもみられるが、その多くは1930～32年の3年間に集中している。

宮本氏の回想によれば、この研究の構想は既に1928年夏、移川・宮本両氏による最初の高砂族調査の時に遡る。また、馬淵氏も「昭和四年秋及び昭和五年春にアミ族とブヌン族の氏族組織を調査したのであるが、系譜を中心とする歴史的な見透しを持つことが、種々の社会関係を

理解するのに有益なことを痛感⁽¹⁰⁾していた、と記されている。

こうして採集された各種族の系譜は309に達し、高砂族（平捕族を除く）の全部族に及ぶものである。

各種族についての実査に基づく聴き取りによって、その系譜とともにそれぞれの発祥伝説を採集し、各種族・部族の発祥地やその後の移動関係を明らかにしている。

本研究は、その後の高砂族研究におけるもとも基本的な文献としての意義を今日でも持ち続けているし、歴史の経過とともにその意義は一層大きなものになるであろう。

ここで、やや突飛かもしれないが1977年10月24日に、国際交流基金の招きで来日したClaude Levi-Straussの東京「朝日講堂」における講演⁽¹¹⁾が注目される。

それは「民族学者の責任」と題するものであるが、Levi-Straussはその中で、世界の民族学が置かれている困難な問題を具体的な例をもって示しながら、民族学者がとるべき道を率直に提示したものであった。

その上でさらに、かつて無文字社会に生きた人たち、あるいは現時点でもなお無文字である人たちが「私たちと同じように自らの根源、ルーツとの接触をとり戻す必要、自分の過去を再発見するの必要を感じることになるでしょう。他のいかなるヒューマニズムにも似ず、他のすべてのヒューマニズムを補完する自分たち独自のヒューマニズムの形態をはっきりさせる必要を感じるでしょう。そのとき、どこにそれを求めることができるのでしょうか。昔ながの慣習や、物や技術ではありません。そうしたものは性急に捨て去られて、安っぽい西洋の物品や、西洋の科学に置きかえられているでしょう。求めるものが見出されるのは、民族学者の著作」であるとも述べている。

このような指摘をまつまでもなく、本著は前記三氏による後世に残る業績であるとともに、前に記した戴国輝氏の批判は批判として、現在の、そして将来の高砂族の人たちにとって、

貴重な資産としての意義をもち続けることであろう。

『台湾高砂族系統所属の研究』は、刊行の翌1936年に「学士院賞」、同じく『原語による台湾高砂族伝説集』には「恩賜賞」が授与されている。

6.

総督府の「蕃族調査」と台北帝国大学の調査は同じく高砂族を対象とするフィールドワークであり、しかもほぼ同時期に開始されたにもかかわらず、両者の間では相互に何の交流もなく進行していったようである。

一方が行政や、いわゆる理蕃の必要性からの調査事業であったのに対して、『台湾高砂族系統所属の研究』と『原語による台湾高砂族伝説集』は、まったく純粋な学問的立場からの調査・研究という基本的な性格の違いがあったし、さらにはその調査費の出所の違いという事情も介在していたのであろう。

前記の岩城氏は、昭和8年8月8日から9月7日の一ヶ月間、『台湾日日新報』に連載された台湾における朝野知名士の蕃地開発に関する所見⁽¹²⁾に対して、それぞれ「寸評」を加えている。

この紙上での移川氏は「此の山地に安住の天地を与へ、健全にして忠誠なる高砂族育成の大事業を達成すべく、なまじ平地移住など考ふべきでない」との所見を寄せている。これに対して岩城氏は「督府が領台以来今日まで、多年実行し来り、著々としてその実効を納めつつある奥地蕃人の平地山脚地方への集団移住事業に対して、大反対を言明」しているとして、「権威ある台北帝大の教授として、本島の高山地方奥蕃の実情に就いて、今少し実地踏査をなし、実際的研究をされたりしならんには、かくも皮相的な意見を主張されなかつたであらう」と評し、それは「恰も蜃気楼所論」ある、と痛駁している。

いずれにしても『台湾日日新報』の記事をとおして、当時の大学と総督府官僚＝学者と行政官との考え方の相違や、その関係の一端を窺うことができよう。

この一文の中で、はからずも岩城氏自身が述べているように、高砂族の平地山脚地方への集団移住が、実は「蕃地森林の保護、平地方面水源涵養、蕃人生活の安定等の理由は、なる程一応の理由ではあるが、その最重大なる理由は、彼等の凶暴性を、現実的に防遏する警備上の重大事に存在」したことが明白な事実として記されている。同様のことは、1935年6月に作成された台湾総督府警務局理蕃課の『十年継続蕃社集団移住計画書』（謄写版で表紙には「蕃社集団移住ニ関スル調査」と記載されている）でも、集団移住による授産の確立と生活の安定が目的とされているが、それとともに「教化指導ノ徹底ヲ図リ…彼の凶害ノ如キハ茲ニ跡ヲ絶ツニ至ルハ勿論蕃社集約ニ依ル警備線ノ縮小ハ理蕃警備費ノ軽減ヲ計ル等直接理蕃ノ効果ヲ促進セシムルノミナラズ從來奥地散居ニ依リテ蕃人ノ専有シ居タル広大ナル面積ヲ移住ニ依リテ集約縮小シテ一般山地開発ノ為ニ提供シ…」と記載されていることから裏付けられる。

山地に居住する高砂族の移住問題について、後にみる小泉 鐵氏も「東部台湾及び蕃地はこれをすべて蕃人の手に委すべきであると主張するのである。それは彼等の将来の発展の為にこれ等の地方は彼等の為に保有せらるべきものである」と述べるなど、その見解は他にも教育、産業、開発をはじめ宗教、集団生活などに及んで⁽¹³⁾いる。

こうした見解は「本島の高山地方奥蕃の実情に就いて、今少し実地踏査をなし、実際的研究をされた」人のものであり、これらが当時の行政に生かされていたならば、高砂族統治に関わる問題はまた別な展開を示したかもしれない。小泉氏の見解が示されたのは昭和3年6月であるが、その2年余の後には霧社事件が発生したのである。

元はと言えば、高砂族や平埔族こそ台湾の先住民族であって、漢民族に追われ、日清戦争による台湾割譲、そして日本の敗戦によって中華民国へと、二度三度の政治的変遷に生きることが余儀なくされた人たちである。それは、この

人たちが本来の名前のほかにも日本式の氏名をもたされ、さらには現在の漢民族式の氏名をもっている、という一事にも象徴されよう。

高砂族が日本語なり、中国語なりの文字をもってからかなりの年月を経ている。この間には戸籍が整備されただけでなく、系譜のもつ社会的機能は衰退したし、これら諸般の事情はその系譜記憶の急速な喪失に迫車をかけている。

50有余年前のこれらの業績がなかったとすれば、高砂族の系譜の歴史的遡及は極く限られたものにとどまり、その多くは永久に失われていたかもしれない。

『台湾高砂族系統所属の研究』では、高砂族を次の9種族に分類している。

1. アタヤル (Atayal) 族
2. サイシヤット (Saisiat) 族
3. ブヌン (Bunun) 族
4. ツオウ (Tsou) 族
5. ルカイ (Rukai) 族
(ツァリセン)
6. パイワン (Paiwan) 族
7. パナパナヤン (Panapanayan) 族
(プユマ)
8. パンツアハ (Pangtsah) 族
(アミ)
9. ヤミ (Yami) 族

ここでは、パイワン族からピユマ族を独立させてパナパナヤン族、また同じくパイワン族の一群をルカイ族としたことや、アミ族をパンツアハ族と呼称している。

一方の『原語による台湾高砂族伝説集』では、高砂族をいわゆる「生蕃」と「熟蕃」とに分け、その言語については

- (1) 現在固有言語として行はるるもの
- (2) 或程度に於て固有言語として行はるるもの
- (3) 固有言語として行はれざるもの

以上の三つの内の(1)が蒐録されている。

そして、ここでの種族分類は次の12種族となっている。

1. アタヤル (Atayal) 族

2. セーデック (Seedeq) 族
3. サイシヤット (Saisiat) 族
4. ブヌン (Bunun) 族
5. ツオウ (Tsou) 族
6. カナカナブ (Kanakanabu) 族
7. サアロア (Saaroa) 族
8. ルカイ (Rukai) 族
9. パイワン (Paiwan) 族
10. プユマ (Puyuma) 族
11. アミ (Ami) 族
12. ヤミ (Yami) 族

いずれにしても、台北帝国大学、及び台湾総督府によって実施された二つの調査は、日本人によって実施された最後の高砂族の組織的な調査・研究となった。したがって、これより後の研究は、ほぼ個人レベルのものに限定されることになる。

7.

昭和初期の高砂族調査では、まず小泉 鉄氏を挙げることができる。氏は昭和3年頃から高砂族に関する論稿を発表し初めているが、その主なものを拾ってみると以下のようなものがある。⁽¹⁴⁾

1928年「霧社蕃社会組織とガザの研究」
 1929年「婚姻に依る親族関係の呼称」
 1929年「台湾蕃族の社会組織に就いて」
 1929年「パカントカワスーアミ族寄密社」
 1929年「バヤールアミ族寄密社」
 1930年「台湾蕃族の問題」
 1930年「台湾蕃族の成人式に就いて」
 1930年「蕃社の集会所制度」
 1931年「蕃族の社会組織に関する資料(一)」
 1931年「蕃地と蕃族」
 1932年「台湾の蕃族とは」
 1932年『蕃郷風物記』
 1933年『台湾土俗誌』

『蕃郷風物記』は、文字通り高砂族に関する風物記で、著者自身も「読物として読者に台湾の蕃族とはどんなものかといふことを知っていただくだけ⁽¹⁵⁾」と言うように学術書の感じは少な

いが、アミ族とタイヤル族についての社会制度や慣習などの記述は、実際の踏査に基づくものだけに注目すべきものがある。

『台湾土俗誌』でも記述の主体はアミ族とタイヤル族に關しているが、『蕃郷風物記』に比して本著はこの両族に關する調査報告の体裁がとられている。

この二つの著書からみると、馬淵氏の指適されるように「gaga その他の名称で呼ばれる一種の祭祀集団乃至禁忌共同体及びそれをめぐって見出される慣習諸規定⁽¹⁶⁾」に關心があったようであり、その他には年齢集団や相続に關する記述などが見られる。

氏は「台湾に於ける調査資料の細目を整理中であって、その完成を待って理論的討究を發表する⁽¹⁷⁾」構想をもたれていたようであるが、これは遂に実現するに至らなかった。一説では戦災のために資料の全てを焼失されたことによると言われる。先に大震災で森 丑之助氏の資料を失い、今また戦争で小泉氏の資料を失ってしまったわけである。小泉氏の踏査の時期が霧社事件を挟んでの昭和初期で、しかもその関心がタイヤル族やアミ族に向けられていただけに惜しまれる。

既述のように、氏は『台湾土俗誌』の「蕃人の生活と統治」と題する論文の中で霧社事件について論及している。そこではタイヤル族のペシミズム、オットフ、プサネックなどについて述べるとともに、フレーザーの「ヨーロッパ式」の法律や道徳の原則に即して蕃人を統治することとは、よき統治者に最高の仁慈的動機以外の何ものも働いてない場合であっても、それは常に危険であり、又惨虐であることすらまれではないのである」という言葉を引用してこれに同感を示している。そしてさらにタイヤル族の禁忌や信仰と新しい信仰（仏教の地獄・極楽の絵解きを例示している）との相剋を指摘して、「信仰においては、彼等の迷信なるものを打破するよりもまず彼等の信仰を忠実に生かし、その信仰をみだりに妨害せぬことの方が大事である」と述べるなど、小泉氏の姿勢は同著内の

「蕃人統治の問題」においても一貫したものになっている。

つぎに、岡田 謙氏は早くも1933年には『社会学』（5号）に「未開社会における集団諸形態の交錯—台湾ツオウ族に於ける一例—」（同名で『南方土俗』（2-4,1933年）に再録）を發表している。これは後に内容を修正・發展させて「台湾北ツオウ族の家族生活」（『家族と村落』第1巻（1939））や、「北ツオウ族の家族生活」（『未開社会における家族』（1942））と題してそれぞれ収録されている。

岡田氏の研究は、年齢階梯や首狩りなどの習俗に關する論文もみられるが、その中心をなすのは高砂族の家族を対象としたものである。

高砂族はその家族形態からすれば、小家族の形態（タイヤル族、パイワン族、ヤミ族など）をとるものと、大家族の形態（ブヌン族、ツオウ族、パンツァ族）をとるものとに大別できるが、岡田氏の調査はその両方に及んでいる。

上記の論文では、ツオウ族の社会組織、家族構成、家族機能などに關する詳細な報告を行っているが、ツオウ族の家族は①親縁関係の近い

父系血縁集団（同姓）から成り ②同一居住 ③経済生活や農耕儀礼の共同 ④服喪などの連带的感情 ⑤従兄弟などを含む大家族を理想とすることを明らかにしている。しかしこれらの大家族の中に「夫婦子供を中心とする小家族的結合は常に存在し、周囲の事情が許せば小家族として分立する傾向を蔵」していること、さらに ⑥経済生活が変化し平和が維持されるようになること、家族は次第に小家族化しつつあることを指摘⁽²⁰⁾している。これは、後にマードックのいう核家族的結合の重要性に關する先驅的発言として注目される。

古野氏は、すでに述べたように帝国学士院の囑託として高砂族の慣習用語の現地調査のために台湾を訪れ、高砂族の居住地に入りその間に採録された資料によって高砂族の宗教に關する論文を發表されている。

1934年「アタイヤル族の信仰心理」（上）（下）、

昭和10年代の高砂族関係の研究者として、今一人、千々岩助太郎(1897～)氏の存在がある。

当時、台北工業学校に在職されていた氏は、学術振興会の援助を受けて、高砂族の住家について貴重な研究資料を発表されている。1937年の『台湾高砂族住家の研究』第1報に始まる一連の報告書は、50年後の今日になって益々その価値を高めている。それは、今では高砂族の伝統的な住家の多くが消滅し去り、過去のそれを知る数少ない拠り所の一つだからである。

1970年頃に訪ねた或るタイヤル族の村には、以前の建物も一部残っていたが、その数年後には既に無くなっていた。

これまでに述べてきた各著にも、高砂族の住家に関するものは含まれている。けれども、氏の報告書にみられるような精緻なものは少ないようである。氏はその専門的立場から、各部族の住家について正確な計測を行うとともに、家屋の平面図、正面図、断面図や屋内外の写真、配置図などが添えられ、また住家だけではなく、穀倉や鶏舎なども含まれている。この資料があれば、今日でも全く同様なものを復元することが可能であろう。

なお、以上の報告書は1960年に『台湾高砂族の住家』として刊行されているが、今日入手することは極めて困難である(印刷されたのは90部にとどまる)。戦後の台湾では、高砂族関係の文献は多数復刻されているが、本著と、森氏のもの(『蕃族図譜』)とは、写真を多数含む所為か未刊のようである。

参考文献

- (1) 馬淵東一 1953 「高砂族に関する社会人類学」、『民族学研究』18巻 1-2合刊, 97頁
- (2) 古野清人 1972 「高砂族調査の追想」(『古野清人著作集』月報1, 8頁)によると、1931年, 1933~34年, 1938年, 1939年, 1940年の5回である。
- (3) 台湾総督府警務局 1937 『蕃地開発調査概要並高砂族所要地調査表』28~29頁
- (4) 池田敏男 1980 「柳田国男と台湾—西来庵事件をめぐる—」, 国分直一博士古稀記念論編纂委員会『日本民族文化とその周辺—歴史・民族篇—』456~457頁。
- (5) 岩城亀彦 1935 『台湾の蕃地開発と蕃人』, 自序5頁。
- (6) 台湾総督府警務局理藩課 1937 『蕃地開発調査概要並高砂族所要地調査表』27頁。
- (7) 馬淵東一 1953 前掲論文, 91頁。
- (8) 移川子之蔵・宮本延人・馬淵東一 1935 『台湾高砂族系統所属の研究』例言1頁。しかし馬淵氏の採譜記録によれば1929年7月25日(系譜85・86)のものなどもあり、実質的にそれ以前からの参加である。
- (9) 宮本延人 1986 『台湾の原住民族—回想・私の民族学調査—』95~100頁。
- (10) 馬淵東一 1953 前掲論文, 91頁。
- (11) C.Levi = Strauss 大橋保夫訳1978 「民族学者の責任」, 『世界』391号, 359~373頁。
- (12) 岩城亀彦 1935 前掲書 324~327頁。
- (13) 小泉 鐵 1933 『台湾土俗誌』292頁。
- (14) 吉岡弥生 1967 「日文書刊所載有關台湾土著論文目録(一)」, 『国立台湾大学考古人類学刊』29/30 期合刊。
- (15) 小泉 鐵 1932 『蕃郷風物記』序2頁。
- (16) 馬淵東一 1953 前掲論文, 91頁。
- (17) 小泉 鐵 1933 『台湾土俗誌』序3頁。
- (18) 岡田 謙 1932 「年齢階級の社会史的意義—特に台湾アミ, プユマ, ツオウ三族の事例を中心として」, 『社会経済学史』1-4, 133~150頁。
- (19) 岡田 謙 1935 「アタイヤル族の首狩」, 『民族学研究』1-1, 123~127頁。
- (20) 岡田 謙 1942 『未開社会に於ける家族』169頁。